アメリカ・インディアン保留地のカジノ

青柳清孝

これまでインディアン保留地の経済開発は種々試みられてきた。その例として、私が訪れたプエブロ・ラグーナのウラニウム採掘がある。保留地の経済開発として、このような鉱山資源や石油、そして森林木材さらに海洋資源があろう。戦時中には軍需産業に関連する工場が保留地に建設される。

しかしそれらのいずれも資源の枯渇や戦争の終結によって、必ずしも永続的性質の開発にはならない。そのような状況にあって、観光とカジノは永続する可能性の高い開発事業であると考えられる。これらの分野における開発が軌道に乗り成功する迄には部族内外の障壁を乗り越えなければならない。

本発表ではカジノを取り上げ、次の順番で話を進めたい。

１）カジノの現状
　a.インディアン賭け事全国協会提供の情報を中心に
２）カジノ誕生までの経緯
　a.「カバゾン判決」（１９８７年）
　b.「インディアン賭け事条例」（１９８８年）
　c.「州と部族間の協定」
３）カジノ運営をめぐる政治的駆け引き
　a.州議会議員と部族政府
４）カジノの多面的貢献
　a.部族保留地の経済・社会・文化に対する貢献
　b.保留地外の地域に対する貢献
５）最近３年間の状況と問題
　a.カジノを保留地外へ開設という声と反対
　b.合衆国議会議員選挙の有権者登録と投票問題
　c.カジノは飽和状態か
　d.勝者と敗者、犯罪の増加など